

「茶旅」

”こぼればなし”

(16)

ベトナムにもいたヤオ族 お茶との関係は

コラムニスト 須賀 努



ベトナムの茶畑にはこれまで、南部のバオロック、北部のタイグエンに行き、その様子を眺めたことがある。バオロックは台湾資本による大規模な烏龍茶生産が行われており、またタイグエンでは、ハノイの住民などが好む渋い緑茶の生産現場を見ることが出来た。今回は著名な研究者である松下智先生と一行に混ざって頂き、ベトナムを再訪した。松下先生は50年以上に渡り、茶の現場に足を運ばれ、多数の著書がある。85歳とはとても思われない精力的な活動を続けられており、筆者の行っている茶旅の大先輩として、ご一緒出来たことは、大いに勉強になった。『茶の源流を訪ねる旅』という名称なのに、なんと先生

から『今回お茶はないからね』と言われたのがとても新鮮だった。お茶がないのに茶の源流？とても不思議な気持ちだったが、このツアーに参加した意味は結果的に大きかった。

ハノイから飛行機で1時間、ベトナムがフランスからの独立を決定つけた戦いで有名なディエンビエンフー。そこから車で4時間ほど登った山岳地帯へ分け入った。そこは中国国境からも比較的近く、タイ族、モン族など少数民族が多く暮らす場所だった。ホテルで出されたお茶は、かなり渋い緑茶。ポットから出してみると葉っぱが大きい。村人の案内でこのお茶の葉が生育している場所へ行ってみた。かなりの大木で、村の男性は

軽々と木に登り、茶葉を掴んで降りてくる。『下の方は摘みやすいからすぐに採ってしまっ』とか。ツアー参加者の中には、この茶葉と同じものを使い、実際に天日干し、釜炒り、乾燥などの作業をして、お茶を作った人もいた。きちんと作り、時間を置けばかなりまろやかな味になった。地元民はそこまでお茶にこだわりがなく、簡単に茶葉を揉んでお湯を注ぐケースラに見掛けた。

しかしこの大きな茶葉は何であろうか？大葉種といえば、アッサム種を思い出すが、今回は植物学が専門の大学教授も参加されており、『これはカメリアタリエンシス』と教えてくれる。これまでお茶の世界を一方からしか見ていなかったが、植物学の観点から見ると、現在我々が普通に語っているお茶の概念が、かなり変わってしまっことが感じられた。いわゆる茶樹は学名をカメリアシネンシスというが、その類似種として、カメリア

タリエンシスがあるという。だがこれを茶樹とは言っていない。今回の旅に茶がない、とはそういうことだったのか。ただ世の中にはハーブティーや杜仲茶など、茶葉を使っていないが茶と名乗っている飲み物が沢山あり、これがお茶の定義を混乱させる要因だと以前から思っていた。正直教授に何遍も教えを乞うたが、植物学的なお茶

については、その基礎知識のなさで混乱が相俟って、一から勉強しないととても説明できるようにはならないと痛感した。

さて、このカメリアタリエンシスは昔からベトナムのこの地に自生していたのだろうか。そこにある民族が登場する。中国でヤオ族と呼ばれている彼ら、ベトナムではザオと発音されていた。ヤオ族は中国湖南省辺りから雲南省、貴州省などに広がった人々で、主に焼き畑農業を行っており、その居住地を移動させる民族であるらしい。今回の旅でも何軒ものヤオ族の家を訪問し、長老に話を聞いたが、大体2-3代前に中国からこの地に移り住んだ、という。そして現在は商売をしている人もいるが、基本は農業、それも焼き畑をしているようだ。実際の際の中でも山の斜面から煙が上がっているところを目撃している。焼畑の後に茶の種を撒くとよく育つという話も聞かれたが、それ

はタリエンシスにも当てはまるのだろうか。

ヤオ族の長老の家を訪ねると、家の入り口には中国で対聯と呼ばれる張り紙が両側にあり、何とそこには漢字が書かれていた。文字が新しいので比較的最近書かれたものだ。だがこのベトナムで一体誰が漢字を書いたのだろうか。長老は奥から古い冊子を取り出してきた。そこにも全て漢字で家系図に当たる、一族の人名が列挙されていた。更にその長老は『家先単』というその冊子名を標準的な中国語で発音したのだ。これは口伝であり、親から習ったというが、これには本当に驚いた。

これまで全く注目していなかったヤオ族。彼らが茶の類似種、タリエンシスを持って中国からベトナムに渡ってきたのだろうか。実に興味深い謎である。あとは松下先生が研究成果を纏められる日を待つのみである。



ヤオ族が持つ漢字で書かれた家先単

すが つとむ